

ブッチーニ：歌劇「ラ・ボエーム」 第2幕 舞台と音楽

2002.9.1

表の見方 小節番号での + - は、それぞれ練習番号から数えて何小節目、練習番号の前何小節という意味です(+1は省略)。
 パート欄はとりわけ大きく関わるパートを示します。全員または明らかにわかる場合は記入しません。
 多少、でしゃばったことも書いてありますが、最終的にはあくまで指揮者の指示に従ってください。

第2幕 カフェ・モミュス

練習番号	小節	パート	演奏のポイント	舞台での動き
冒頭		Tp	Allegro focoso(火の如く熱情を持って) 第1幕でショナールが「クリスマス・イヴなのに家で食事するなんて！ラテン街(Quartier Latino)へ行こう！」と言うときの「カフェ・モミュスの主題」(この時は憧れを感じさせるゆったりしたもので、フランスのキャロルの旋律から借用したものとされている)が fff のTp で強奏される。賑やかで楽しい雰囲気を出すこと。	クリスマス・イヴを楽しむ群衆で賑わう、カフェ・モミュスの前の広場。物売りの店が出ている。幕が開くと舞台上に溢れる程の群衆に混じって、第1幕の登場人物である画家マルチェルロ、音楽家ショナール、哲学者コルリーネがそれぞれ夜店をひやかしたり、若い子に声をかけたりして楽しんでいる。もちろん、第1幕で感動的な出会いを演じた主人公で詩人のロドルフォとお針子ミミもこの群衆に混じっている。
1		Fg, Hr, Tp	「群衆の主題」ここで合唱が入る。	
4	-2,1	Ob,CL,Hr,I,Vi	16分音符はくっきりアクセント・スタカートを活かせて。しかし、粋な軽さを失わないこと。	*この幕は、ボヘミアン達と群衆が舞台で別々の動きを同時に演じるところが面白く、音楽もその両方を表現すべく行ったり来たりし、あるいは同時に進行し、さらには音楽的には何の関連・前触れもなく別の要素が挿入されるといったブッチーニの実験的な試みがなされている。
4			この2小節目間でラッパ(ホルン)を2回Dの音で吹くよう指定されている。オーケストラの伴奏部はEsなので半音高い。	ショナールが店で古ぼけたホルンを見つけ吹くが「このレは違うぞ！」と歌う。
	+12	Tim,Vc,Cb	上行分散和音の最後の音。pp だが丁寧にきちと。場面転換を表わす。	
4	+13	Vn, FL	「ボンネットの主題」。この主題はこの幕の終わり第3幕の別れのシーンでミミが思い出にとロドルフォに渡す時にも出てくる。フレーズの終わりの16分音符4つの最後の音はスタカート。	ロドルフォとミミが腕を組んで帽子屋に入る。同時に他の店でコルリーネが古着の外套を買う。この外套は第4幕でコルリーネによって歌われることになる。
		Vn I	この場面のしめくり、9小節目の2拍目までは rit というよりは急ブレーキ、3拍目でスビト a tempo 直ちに元にテンポに戻す。指揮を見るというより、体で覚えること。次の小節は軽やかに！(ここはマルチェルロとユニゾン。3拍目の16分音符は「d'amor! 愛」と歌う。)さらに次の小節のピチカート(レ・ソ・レ)は心持ちおさめる。イン・テンポでていねいに。	マルチェルロが女の子に声をかける。
5			再び合唱(行商人の売り声)が入る。	ショナールがカフェ・モミュスの前に立って、皆を待ちながら群衆を冷やかに歌う。
	+3	FIL,Ob,CL,Vn,Vc	シンコペーション。これは次の小節で「Ah!..」と歌う子供たちを導く。	
	+9	FIL,Ob,CL	sostenuto un poco(少し音を保って) これまでの快活な雰囲気をやや変えてしっとりした感じを出す。	ロドルフォとミミが帽子屋から出てきて、短いやりとりを交わす。「このピンクのボンネット、似合うかしら？」等。仲間はカフェ・モミュスの前に集まり、席を探す。
6			再び「ボンネットの主題」	会話では既にボンネットの話題は終え、ロドルフォが自分の親戚にお金持ちがいってもっといいものを買ってあげる、とホラを吹いて首飾り売りを追っ払う。
	+7	木管、弦	Lo stesso movimento, ma un poco piu animando (同じ速度で、しかし少し活気づいて)「カフェ・モミュスの主題」の変形に乗って、パントマイム調の舞台を音楽で表現する。この2/8の間、合唱は「ah,ah...」しか歌わない。最初は子どもの笑いは軽やかに(弦のピチカート)、sf は大人の「Ah! ah!...」に鋭く合わせる。	二人は舞台の奥へ移動し、群衆の中に見えなくなる。他の仲間はカフェ・モミュスでテーブルを確保する(テラス席)。店の外では、商人がおおげさな身振りで衣料品などの売り出しを始め、群衆や子供たちが集まってきて笑う。
7			3/4の半音階上行において、子どもや物売り、市民たちの様々な声によってこの幕での最初のクライマックスを形成する。	この頂点で合唱は「カフェが近いぞ！ モニユスへ行こう！」と歌う。
	+9	Tp	再び「カフェ・モミュスの主題」。	舞台の中心はカフェ・モミュスの中に焦点が集まる。すでにマルチェルロ、ショナール、コルリーネはテーブルに着いている。

8	-3	FL,Pic,Ob,CL, Vn,Cb	第2幕を大きく4つに分けると、その2番目にあたる8番に入るための切り替えの音楽。この下降分散和音でガラッと雰囲気を変える。とりわけ最後の到達音はコントラバスだけ！	
8		CL	Lo stesso movimento, ma sostenuto(同じ速度で、しかし音を保って) ロドルフォ以下ソリスト達の歌を導くので重要。第1幕の幕切れで歌われる「愛の主題」の変形。ここは、二人のやりとり、店の中の会話、店の外の群集の掛け声が同時に進行する。	店の外でミミが他の男性に声を掛けられて振り返ったのを見たロドルフォがやきもちを妬く。二人は直ぐに愛を確かめ合う。
9	-3		「愛の主題」の頂点である。感情を込めて！ロドルフォとユニゾン。	ミミに「あなた幸せ？」と聞かれたロドルフォが「うん…とっても！」と答えるところ。
9	+3	弦	この幕最初の難所。	この頂点でロドルフォとミミは店に入っていく。
	+7	FL,Ob,CL,Tim	スコアを見て音を切る箇所、入る箇所を確認すること。	バルビニョールが「バルビニョールのおもちゃ屋だよ！」と舞台裏で歌う。
10	-1	弦	ピチカートは指揮を見て入る。フェルマータ後のロドルフォ「Qeusta e Mimi」の「クエスト」と同時。譜面に書き込むこと。	
10		弦	小節の頭が上記の「Mimi」の「mi」に合わせる。これは歌を聞くべし。譜面に書き込むこと。6小節目は第1幕でのミミの有名なアリア「私のミミ」の旋律。その後はロドルフォとユニゾン。	ロドルフォが仲間にミミを紹介する。ロドルフォは詩人らしく感動的な言葉を尽すが、他の連中は半ばあきれて聞いている。この幕での唯一テノールらしい旋律を聴かせる詠唱的な部分。
11	-4		ここもロドルフォに合わせる。とりわけ3連符に注意。	
11			3、4拍目と次の小節は笑い声「Ah! Ah!」とユニゾン。笑い声らしく！	ロドルフォの感動的(?)なミミを紹介する演説を他の仲間が茶化すところ。
	+3	Pic,Ob,CL,B- CL,Tim	CLによる1オクターヴ間の下降半音階終幕での死を暗示する。Pic,ObのテヌートとTimのロールは不吉な雰囲気をつくる。	他の3人が順番にミミの入会を認める。
12		FL,Ob,CL,	スコアを見て音を切る箇所、入る箇所を確認すること。	再びバルビニョールが「バルビニョールのおもちゃ屋だよ！」と歌う。
12	+3	全	コルリーネの「Salame」のアウトファクト「Sa」を聞いて入る。譜面に記入すること。ガラッと気分を変えて陽気な音楽を。	コルリーネがボーイに「サラミ」を注文する。「Salame」はサラミソーセージの他に「ばか野郎」の意もあるとか。ここから群集の合唱。最初はおもちゃ屋のバルビニョールに群がる子供たち。
	+10	打楽器	ここから軽快な音楽づくりに打楽器が重要な役割を果たす。とりわけサイド・ドラムはその中心となる。13前後は特に重要。メロディは「群集の主題」の変形。	*この場面は子どもと大人の合唱団が入り混じり、動きも交えて歌うのでテンポが不安定になったり、縦がずれやすい箇所。要注意。
13	-8	弦	col dorso dell'arco(弓の背で) コル・レーニョ。子供たち(少年少女合唱)の伴奏だから軽やかに！	ボヘミアンたちは思い思いに食事を注文する。
13		弦	col crine(馬の尻尾で) ここから普通の弾き方で、risoluto(決然と)。ガラッと雰囲気を変える。	二重線からは母親たちの合唱。金切り声を上げて子供たちを叱りつける。「こんな場所になんているの！家に帰って寝なさい！」など。
14	-5			男の子がめそめそ泣きながら「ラッパがほしいよ！馬のおもちゃも！」とソロで歌う。先のバルビニョールの歌と同じ旋律。
	-4	Vn	3拍目の裏の32分音符。出るタイミングがきわめて難しい。	男の子の後にロドルフォが「ねえ、ミミ、君は何にする？」と聞いた最後の音符に続ける。次の小節でミミは「クリーム(プディング)を」と答える。
	-3	Ob	男の子の歌のエコーである。	
	-1			ショナールが、ミミの注文をボーイに「上等なやつを！」と伝える。それを合図に14。
14		打 Vn I	再び軽やかに。8小節目のVn Iは極上の軽さをもって！15に向けて遠ざかっていく様を表現する。とりわけサイド・ドラムがこの遠近感のある光景を最も的確に表現できる。	バルビニョールが通りを横切っていく。再び子どもたちの合唱。
15			ここから練習番号16まで2/4の間に3/4がときおり挟まる。決してまともにはしゃべらないボヘミアン達の姿を表現しているという説もある。ピチカートは軽やかに！歌が揺れてもビツクリつけること。決して先にいかない！	店の外からボヘミアンのテーブルに焦点が移る。
	+6	CL,Vn I	ミミの歌とユニゾン。その後に Vn I が続く。ミミとロドルフォは互いの愛に夢中。他の三人は二人をちゃかしたりそのアツアツぶりに辟易気味。	マルチェルロがミミに何をロドルフォに買ってもらったのと聞き、ミミがそれに答える。この幕ではずっと舞台にいながらまともに歌う箇所の少ないミミがほんのちょっぴり声を聴かせるところ。
	+14	Fg,Vc	ボヘミアンの主題(第1幕の冒頭からしばしば顔を出す。ここがこの幕の1回目)+30も(2回目)。	
	+50		慣例的にテンポ・ルバートするところ。指揮者を必ず見る。この後、クライマックスへ向かう。	この後、幸せの真っ盛りのミミとロドルフォに対して、現在「喪中」(失恋中)のマルチェルロがイライラしてくる。

	+66	Fg, Hr I	クライマックスの最初のヤマをしめくくる。ピシッと決める(ボヘミアンの主題の3回目)。	音楽が最初のヤマを迎えた後、「愛は蜜より甘い」と歌うミミにマルチェルロが不愉快な表情をする。
16	-5	全員	このシーンの頂点。全員で「ボヘミアンの主題」をキッパリと(4回目)。この幕を4つに分けるとその2番目の部分の最後。全体を二つに分けると前半をしめくくる。	全員立ち上がる。
	-1		この前は歌だけ。16-2は慣例的にフェルマータ。出るときは指揮者を見る。ボヘミアン達が全員で「Beviam!」と歌うアウフタクトの「Be」を聞いてから「viam」に合わせる。譜面に書き込むこと。	マルチェルロが機嫌を悪くしたので、話題を変えようと乾杯をする。「Beviam!」=「飲もう!」=「乾杯!」しかし、ここで色気たっぷりの美女がけたたましい笑い声とともに登場。買い物の包みを山とかかえて喘いでいる紳士を従えている。マルチェルロのかつての恋人ムゼッタである。マルチェルロは「ばくに毒を飲ませろ!」と杯を投げ捨てる。
16		全員	brillante, co fuoco(活発に、火のような情熱を以って)付点を効かして、おぼつかない足元、滑稽さも表現する。これはすぐ後に出てくる「ムゼッタの主題」を暗示すると同時にアルチンドロの情けない姿も表わす。	人々の視線を集めて意気揚揚とカフェ・モミュスに入ってくるムゼッタの決してお行儀がいいとはいえない派手であたり構わぬ振舞いに、現在のパトロンである宮廷顧問官アルチンドロがオロオロする。
17	-1	弦	アルチンドロが憤慨するところは、慣例的にフェルマータ。指揮を見て3連符をカチッと。	マルチェルロや仲間のボヘミアンを見つけたムゼッタはその隣のテーブルにつく。「なんで、こんなところに?」とアルチンドロが怒るところ。
17		FL	弦、ムゼッタ、フルート、VnIIと続く重要な箇所。	3連符の後、ムゼッタが「ルル!お座り!」と。子犬並の扱いである。
		Vn II&I	Vn II だけになる重要な箇所。中弓で粒を立てて軽やかに。Vn I がそれを受け継ぐ。	
	+6	FL, CL	Vn I を受け継ぐ。これまでのセカセカした喧騒がおさまり、雰囲気が変わる。	状況が飲み込めないミミに仲間が解説を始める。
	-4	Vn I,II	ひと区切りをつけるしめくくり。特にセカンドのシ - ソ - ミ は重要。ピチカートは次	
18	-2	FL	sostenendo appena(直ちに、音を保持して)「ムゼッタの主題」。コケテッシュな美女を演出する。*原作では、少し調子外れなかわい声の持ち主だったために「ミュゼット」(バグパイプの意)というあだ名がつけられていた。情熱的で男好きのするこの美女は、逸楽と贅沢をこよなく愛していたが、根はすこぶる純真で彼女が真実の愛を捧げたのは画家マルセルひとりだったとされる。しかし、最後は偉い郵便局長婦人におさまることになっている。	マルチェルロがムゼッタを「姓は誘惑…」と解説をする。同時にムゼッタは、マルチェルロが自分を無視していると怒り出す。*このあたりの場面は、マルチェルロが荒れに荒れ、他の仲間は面白そうに成り行きを見守る。
19	-1	Va, Vc	col canto (歌に従って) マルチェルロが声を聴かせる。慣例的にここはフェルマータ。32分音符は指揮を見て。	
19			舞台の騒ぎを音楽で表わす。オクターヴの跳躍、上昇下降分散和音はアルチンドロのオロオロする様を表現。	自分を見ないマルチェルロに、ついにムゼッタの怒り爆発。ボーイを呼んで皿が匂うと文句を言い、皿を投げつける。マルチェルロは騒ぎに振り向かないどころかますます無視。
	+9	Vn I	このページは第2幕最大の難所。しっかり練習しましょう。パート譜(VnI)3段目のspigliato(自由にのびのびと)はムゼッタとユニゾン。下から2段目のフォルテはけたたましく。	アルチンドロはわけがわからずムゼッタを静めようとし、ボヘミアンたちは思い思いに会話を楽しむ。
20	-12	Vn II, Va,	順次 Vn I に合流する。-10の上昇音階は合唱の笑い声(Ah! Ah! Ah! …)とユニゾン	合唱(お針子と学生たち)も加わる。
	-6	Vn I,II	Punta d'ARCO(弓先で)とあるが、中弓で leggero(軽快に)。	
	-2	Vn, Va, Vc	しめくくりの音楽。きっぱりと。	
20			20+7からのロドルフォとミミが愛を語る音楽への繋ぎ。	ショナールが「この芝居は面白そうだ!」と。
	+7	CL, Pic, VnI	con voce omogenea(?)この幕で唯一のしっとりした音楽。クラリネットの聴かせどころ!	ボヘミアン達の会話を背景に、ロドルフォとミミが愛を語る。ロドルフォは「あんな(ムゼッタみたい)にしたら許さないよ」
	+17		この小節に向けてクライマックスを築くが、スピドでテンポを戻し、ムゼッタのアリアの雰囲気作りをする。	
21	-4	CL, 弦	この形は後にも出てくる。弦のクレシェンドの直後のCbのpppは重要。	アリアを歌う直前に、観客の目をムゼッタに集中させるフレーズである。
21			ムゼッタのアリア「私が街を歩くと」。Tempo di Valzer lento(テンポの遅いワルツ)。しかし、単純なアリアではなく、アンサンブル・フィナーレにつながる歌として位置付けられる。ブッチーニが他のオペラでもしばしば採用している得意とするパターンである。テンポが揺れるソリストの歌につけると同時に、歌の合い間に挿入される他の登場人物たちの合いの手でのテンポや曲想の切り替えなど、譜面づらは易しいが表現は一筋縄ではいかない、オケにとってその実力が問われる箇所。この幕唯一のアリアであり、聴衆もこれを楽しみにしているだけに、しっかり演奏しなければならない。繰り返しCDを聴いて曲の構成を頭に入れ、様々な歌手のCDを聴くことで柔軟な反応ができるように準備することが肝要である。	ムゼッタが店の中の男性に色目を使いながらアリアを歌う。もちろん狙いはマルチェルロ。ムゼッタの歌の合い間に皆の会話などが挿入される。マルチェルロはムゼッタの誘惑に最初抵抗しているが、次第に我慢できなくなる。

22		弦	sulla tastiera(指板の上を弾く) コンバスを除く。	
	+5	FL,Pic,CL	{32分音符4つ}とこの後に出てくる{16分音符の6連符}、この音型はこのアリアにおいて極めて重要な効果音。音符ひとつひとつより、出るタイミングを合わせる。	
23	+13		ムゼッタのアリアの最初のクライマックス。次の小節の弦のピチカートはムゼッタのフェルマータの後に合わせる。この後の音楽で、音符の多くにスタカートがついていることに注目。歌にもわざわざスタカートがついている。	この後、アルチンドロがムゼッタの恥ずかしい歌をやめさせようとするうめき、ミミはムゼッタがマルチェルロに首ったけなのを見抜き、ショナールはマルチェルロの陥落に近いことをニヤニヤ見つめ、コルリーネは哲学者らしくこんなめんどろはゴメンだ、等等が挿入される。
24			ソステヌートの箇所とスタカートのついた音型を意識して弾き分けること。	ムゼッタがもう一息でマルチェルロを落とせると歌う。
	+8		「ボンネットの主題」が出てくるが、ボンネットとは無関係。テンポが大きく揺れるとこ	大団円はもう直ぐ、バラバラだった7重唱が形を見せはじめる。
25	-1		練習番号5の前でも同じ音型があった。小節の後半はムゼッタといっしょ。	ムゼッタが小言ばかり言うアルチンドロに「うるさくないで！」と言う。
25		FL,Pic,CL	聴かせどころである。	ムゼッタがアルチンドロを追っ払うことに考えをめぐらす。
	+4	弦	21-4と同じ音型。21-4は急き込み、ここは遅くなる。但し、1995年の公演では遅くしなかった。指揮者の指示に従うこと。観客の目をムゼッタに集中させる極めて重要なフレーズである。	次の小節で、ムゼッタが突然悲鳴を上げる。「足が痛い！」舞台は大騒ぎになる。
	+7	FL,Ob,CL, Vn,Va	上記の小節の次2小節間はノーカウント。指揮者の合図でこの小節に入る。上昇半音階であるが、その頂点の直前が全音であることに注目！	店のウェイトーから他のお客までムゼッタの周りの集まって、その痛いと言う足を覗き込む。音楽は「ムゼッタのワルツ」を奏する間、ムゼッタの靴を大勢が脱がせようとする。ボヘミアンたちは芝居が大詰めを迎えたと語り合う。
26		シンバル	この幕最大のクライマックス。シンバルが極めて印象的である。	アルチンドロを靴屋に走らせることでやっと追っ払うことができたムゼッタは、マルチェルロと感極まって抱き合う。
	+4	Vn I	スピト・ピアノッシモ。実はこのピアノッシモ(dolcissimo)こそ音楽的頂点であることを見落としてはならない。最大のヤマでないところに劇的な効果をもたらすこの作曲技法こそ、ブッチーニの恐るべき才能を雄弁に語っている(余談であるが、R.シュトラウスも似たようなことに言及している。)。艶っぽく決めたいところ。	しかし、劇場公演ではこの前のfffで大喝采となり、劇の進行が中断されるのが通例である。特にバンドは舞台裏にいて状況がつかめないため、大混乱になるケースがある。ショナールが「大詰めだな」と言い、同時にウェイトーが勘定書きを持ってくる。
27			全体を4つに分けた場合、ここからが最後の部分。「ムゼッタのワルツ」の旋律に外から聞こえてくる行進曲が重なっている。この小節の棒の振り方に注目。	高い勘定書きに驚くボヘミアンたち。皆ポケットを探るが一銭もでてこない。
28			第1幕でてきた「音楽家ショナールの主題」。	ショナールが「ぼくのお金はいったいどこへいったんだ？」と。つまり、第1幕でショナールが仕事で手に入れたお金を他の仲間に分け、さんざん買い物をしてからのカフェ・モミュスに繰り出したからである。*以下の店でのやりとりと外の喧騒は同時に描かれる。
	+4	Ob,CL	「カフェ・モミュスの主題」ここからは、舞台のやり取りと音楽が完全に一致していることに注目。	わんぱく小僧たちが(兵隊は)「こっちから来るの？」と。
	+8	FL,Pic,Ob,CL	ムゼッタが登場してきたときの旋律の断片。	ムゼッタがウェイトーに勘定書きを持ってこさせる。
	+10	Vn,Va	再び「カフェ・モミュスの主題」	ウェイトーが勘定書きをムゼッタに見せる。
	+14	Vn,Va	ムゼッタが登場してきたときの旋律の断片。	ムゼッタが「いいわ!」「早く、あの勘定とこの勘定を足してちょうだい!」と。
			次第に行進曲調になってくる。最後は「カフェ・モミュスの主題」でキッパリと決める。	舞台にはついに鼓笛隊長を先頭に兵隊(巡邏兵)が登場し。群集は歓呼し、ボヘミアンたちはムゼッタを先頭に店を出て群集の中に消える。靴屋からやっと戻ったアルチンドロはどんなにもなく高い勘定書きを見せられて気を失う。ここはすべてパントマイムである。
				幕